佐賀大学美術館
SUAM
THE SAGA UNIVERSITY ART MUSEUM

愛あるツッコミ待ってます

なんでそんなんプロジェクト

写真＝タイトル｜替えズボン　行為者｜Uちゃん　発見者｜ターツー

川遊びでズボンが濡れてしまったUちゃん。「パンツで帰るの恥ずかしい。どうしたらええ？」と聞いてきた。
その場にあった買い物袋を渡したら、履いていた。

なんでそんなんプロジェクトとは

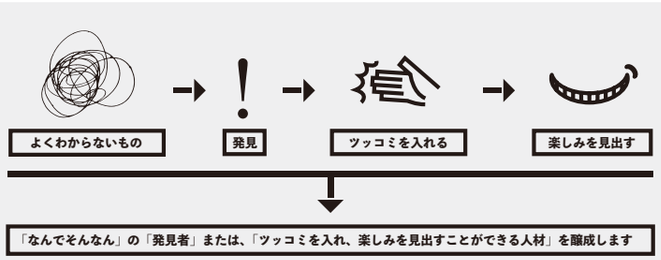
About NANDESONNAN PROJECT

「よくわからないもの」を断絶し、排除するのではなく、または、「無理にわかり合おうとするのでもなく」、想像力を駆使して「わからなさを楽しむこと」

プロジェクトを主催している「ぬか つくるとこ」では、毎日さまざまな「よくわからないこと」に出会います。「よくわからない」というのは、「理解しがたい」または「理解したことがない（未経験）」という状態です。自分の語彙では捉えることができない、未分類の出来事。そういったものに「なんでそんなん」とツッコミを入れて面白く捉え直す。ツッコミによって、多様な人の営みをおおらかに受け入れ「楽しむ」能力を高めます。

「なんでそんなんプロジェクト」は、想像を超える現実を前にユーモアを持ってツッコミを入れることのできる「発見者」に注目し、人が行う営みをできるだけポジティブに捉え、楽しむための方法を模索するプロジェクトです。

鋭敏な感性で社会や物事を編集することができる先端的な人材も必要ですが、ささいな出来事を「クスリ」と笑い、日常を楽しむことができる市井の編集者や「なんでそんなん」の発見者に注目し、耕すことができたらと考えています。



CASE
なんでそんなん事例

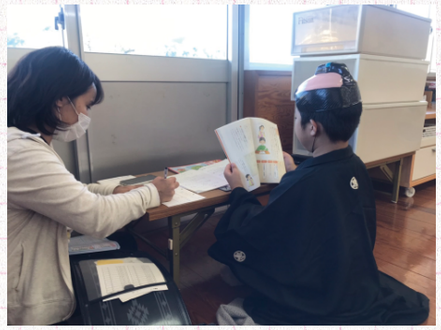
第5回 なんでそんなん大賞 GRANDPRIX 大賞

01

タイトル｜水の水割り
行為者｜愛子ママとチッチキチキオ
発見者｜始動員 T

神の舌を持つチッチキチキオ君は、学校の給食を一切口にしない。なので、午後になると空腹感に耐え切れず、帰宅しようと脱走を図ることが度々あった。
「体のために一口でもいいから給食を食べなさい。」
保健室の先生の指導から逃れようと、ある日、通級指導教室に避難してきたチキオ君。そして、職員室前廊下で「腹減った〜」と転げまわる彼に、窓口からコップ一杯の水を差し出したのは愛子教諭。
「塩舐めて、水の水割りでも飲んでいきな。」
愛子教諭に促されるまま塩を舐め、水の水割りを一気に飲み干すと、笑顔になったチキオ君。以後、職員室の窓口を『スナック愛子』に模様替えしたところ、チキオ君は毎日顔を出し、キープソルトをするほどの常連客となった。そして、水の水割りと愛子ママの愛で身も心も満たされたのか、脱走を図ることはなくなった。

02



タイトル｜侍スタイル
行為者｜Uちゃん
発見者｜Kiyo

宿題をしたくないUちゃん。
侍スタイルになると、スイッチが入る。
途端、その空間は寺子屋に様変わり。
音読も進む進む。

03

タイトル｜脱皮
行為者｜ムスコたち
発見者｜ムスコたちのチチ

ムスコたちはお風呂に入る時、見事なまでに綺麗な型でスボンとパンツを脱ぐ。時には靴下までセットに付いている。足を突っ込めば、そのまま何事もなかったの様に履けそうだ。そもそも、脱皮とはある種の動物が成長するにつれ、その外皮がまとまって剥がれることである。ムスコたちの脱皮は成長の証なのか？それとも遺伝性のものなのか？時々、成人女性のものと思われる脱皮も一緒に発見されている。

なんでそんなんエキスポ

NANDESONNAN EXPO

想像を超える現実を前にユーモアを持ってツッコミを入れることのできる「なんでそんなん」の発見者。そんな発見者たちの温かい眼差しによって見出された「なんでそんなん」が集まる博覧会。オンライン公募による「なんでそんなん」事例によって会場は変化していく。これまでに 4 箇所を巡回。岡山、高知、岐阜、佐賀（2021-2026）

展示会のタイトルは「なんでそんなんエキスポ」とした。展覧会と呼びたくないところにもこだわりがある。僕が障害を取り巻く世界に面白味を感じているのは、アートや展覧会という従来の枠を気持ちよく破壊してくれるからで、その最終的な発表の場を展覧会と呼んでしまっては本末転倒である。その点、博覧会（エキスポ）には古今東西の雑多なものを見世物にするという、少々乱暴な要素も含まれる。そして、EXPOという響きからイメージされる1970年大阪万博には、えも言われぬ浮かれた夢があり、謎の高揚感がある。もちろんEXPO70で浮かれすぎた失敗という反省もその後にはあるのだが、そこにあったエネルギーには憧れる。2021年当時はコロナによって大変な状況であったが、ウィルスの脅威以上にうっとおしい、人が生み出す規制や排除、正義感満載のしかつめらしいムードを一蹴したいという思いがあった。

「なんでそんなんエキスポ」というジョークをコンセプトに据えたおかげで、準備は終始楽しいものだった。展覧会ディレクターという仕事は初めてのことで、気づけば盛り盛りの内容だったが、公然とふざけられるのは幸せである。寄せられた事例をネタにチームみんなで、ラップバトルをしているような感覚だった。秀逸な上の句に対し、どう下の句を作るか、他人のアイデアに自分をどう乗せるか、そんな面白さを空間に落とし込む作業がうまくいったと思う。

「なんでそんなん」の事例を見るうちに、いくつかのパターンがある気がしてきた。トマソン的なものもあるが、それも似て非なる。（＊1）いま、同時多発的に、アール・ブリュット（＊2）とは違うことを面白がろうという試みが起こっている気がするが、その中で「なんでそんなん」がどの位置にあるかを研究したい気持ちでいる。まだ言語化はできないが「なんでそんなん」には独自のキャラがある。社会が豊かになる新しい価値観を生み出すためには、もう少し時間を要する。

＊1：赤瀬川原平らの発見による芸術上の概念。その役にたたなる・非実用において芸術よりももっと芸術らしい物を「超芸術」や「超芸術トマソン」と呼んだ。

＊2：1945年、フランス人画家・ジャン・デュビュッフェが、正規の美術教育を受けていない特異な作品群を「生の芸術」（アール・ブリュット）と提唱した。日本ではオリンピック2020に向けた文化政策としてアール・ブリュットを取り上げる展覧会が多数実施された。

※上記記事は
記録集「そのうち月刊ヌー創刊号」
記事より一部抜粋

滝沢達史 Tatsushi Takizawa

なんでそんなんエキスポディレクター。1972 年生まれ。多摩美術大学卒業後、10 年間特別支援学校の美術教諭として勤務。 以後、美術家として日本各地のアートプロジェクトに参加。地域課題から教育・福 祉など多岐にわたる活動を展開。近年では、不登校・ひきこもりとの協働「表現の森」（アーツ前橋）や、自身で立ち上げた児童福祉施設「ホハル」の代表を務めるなど、教育と福祉を面白おかしく模索中。
takizawatatsushi.com　hoharu.com

高知会場（薬工ミュージアム）の様子（2022）

第 4 回なんでそんなん大賞審査会の様子

毎年 5 〜 6 名の審査員を迎え、投稿いただいた約 100 事例ほどの中から「なんでそんなん大賞」の選考を行なっています。決して「優れた事例」を「選ぶ」ことに注力するわけではなく、発見者の視点の深度や解像度を議論していくことを目的としています。「ユーモアの度合」「困り感からの転換」「行為の過剰性」「発見者 - 行為者の関係性」「自身の体験との対称性」またはあえて「視点の転換がなされずモヤモヤした感覚が残っているもの」など。じっくり話し合いながらそれぞれの賞の選考を行っています。

タイトル｜靴下長族　行為者｜リュウスケ　発見者｜父　※上記写真

靴の中だけ異様に知覚過敏な彼（リュウスケ）にとって、靴下を選ぶことは学校に行くことよりも重要なことかもしれません。少しでもユルかったりすると、遅刻を承知で泣きながら履き替えに帰ってくることも。新品なのに締まりが悪いという理由で、一度も履かないということもザラにあります。そんな彼の儀式は、お気に入りの靴下を引っ張り上げ、その状態のまま慎重に靴を履くことです。当然ながら、本来「かかと」に来る部分はいつもアキレス腱の方にズリ上がっていますが本人は全く気にしておらず、友人に指摘されてもどこ吹く風のようです。 今年の夏頃から気づいた時にそんな足元を撮影するようにしていましたが、少し遡って写真を調べてみると、幼稚園の年中時代まで確認することができました。なんでそんなことになったのか、これからも続けるのかは分かりませんが、彼の気の済むまで好きにやってくれたらと思っています。

第 2 回
なんでそんなん大賞
大賞
GRANDPRIX

なんでそんなん事例投稿先

ホームページより投稿可能
https://nandesonnan.com/post/
なんでそんなん大賞選考｜年 1 回
対象｜全ての方・全ての事象
投稿｜複数回投稿可能
参加費｜無料
大賞賞品｜米一俵（審査員賞あり）

AFTERWORD / あとがき

「記録」をしたり、「名前」をつけたり、周囲の人と話し合ったり

丹正 和臣

Kazuomi Tanjoh

ぬかアートディレクター。1983年奈良生まれ、岡山県在住。大学で美術を学んだ後、2011年よりフリーのデザイナーとして活動。通所施設の美術講師として5年関わる。「生活介護事業所 ぬか つくるとこ」の立ち上げメンバーとして2013年より勤務。コンセプトワーク、デザインワークを担当しており、2020年度よりスタートしたなんでそんなんプロジェクトの企画にも関わる。

所用にて会議を抜けたクロンさん。「ぬかつくるとこ（以下ぬか）」では、代表の中野のことを「クロンさん」と呼んでいる。11月頃、寒くなってきた時候で、その日も土蔵のぬかは、エアコンをつけても底冷えしていた。残されたスタッフは残りの議題を話し合っているが、「今日は寒いな」と心の中でつぶやき、間も無く同じ言葉を隣の同僚に漏らしていた。冷たい風が足元に当たり、その風をたどって目線を送ると、勝手口の引き戸が数センチ空いている。隙間からは夕闇に沈む庭木が見え、引き戸が居心地悪そうにしている。居心地悪そうにしているというのはあくまで主観だが、本来収まるべき引き戸の位置にそれはなく、寒風を招き入れていた。気づいたスタッフが扉を閉めに行き、「またクロンさんですかね～」と談笑した後、暖かくなった部屋で会議は進んだ。

「なんでそんなんプロジェクト」が始動後、「クロンの閉め忘れ」という投稿をする。

ぬか開業から7年。これまでクロンさん本人に閉め忘れを指摘したことはほとんどなく、癖のようなこの行為を直して欲しいと思ったことはなかった。ただ、閉め忘れの理由が気になり、本人に尋ねるが、当人も「分からない」とのこと。そこで、「閉め忘れは生活のバイオリズムと関係しているのかも」すなわち、「体調や仕事の忙しさと何らかの因果関係を発見することができるかも」という仮説を立て、「閉め忘れ」を記録することにした。項目は3つ、【①閉め忘れた扉と戸枠の間に開いた隙間の長さ ②日時 ③写真】を記録する。無意識の行動ゆえ、極力本人には分からないかたちで閉め忘れた隙間を計測し、写真撮影後に、筆者が扉を閉める。記録を集計後、数枚の写真と共になんでそんなんプロジェクトのホームページに投稿した。

ホームページやSNSだけでなく、新聞などのメディアに露出することによって、「クロンの閉め忘れ」に変化が現れる。閉め忘れが減少したのだ。ただ、完全に無くなるわけではなく、時々現れることがある。２０２０年12月26日仕事納めの年の瀬に32mmの閉め忘れを観測できたとき、何故か嬉しかった。

閉め忘れを記録することで見えてくるもの。それはまだまだ分からない。もしかしたら仮説に沿った結果が現れるかもしれないが、大きな裏切りに会うかもしれない。本誌のテーマと同じく「本当のことは分からない」のだ。「なんでそんなん」の特徴はこの「分からなさ」をどのようにして「楽しむか」というところにある。想像力によって新たな問いを見つけ、「記録」をしたり、「名前」をつけたり、周囲の人と話し合ったりしながら、「分からなさを楽しむための手法を探る行為」なのだ。

「なんでそんなん」と「*アンデパンダン」って似てるよねという言葉遊び／ダジャレから生まれた当プロジェクトは、無審査／無資格の公募展「アンデパンダン展」に習い、投稿いただいたもの全てを掲載している。「分からなさを楽しむ」とさらっと書いたが、それは決して簡単なことではない。自分で理解できないものを反射として拒絶してしまうこともあるだろう。けれども、現在（２０２５年10月）集まった６４０以上の事例により、楽しみ方の多様さや、奥行きを見させてもらっている。「人」と「人」、「男」と「女」、「障害者」と「健常者」など、「　」と「　」の境界で起こりうる多様な出会いや衝突に希望を見出さずにはいられないのは私だけだろうか？

最後に、なんでそんなんの投稿者のみなさん、当プロジェクトをに共感していただいた全ての方々にこの場を借りて御礼申し上げます。ありがとうございました。

*アンデパンダン…フランス語で「独立派の意」。パリで、アカデミー（官設の美術展）に対抗して、１８８４年以来開かれている無審査・無賞の展覧会「アンデパンダン展」が始まる。日本では赤瀬川原平などが出展した「読売アンデパンダン展」が有名。

NANDESONNAN ONLINE SEMINAR

なんでそんなんオンラインセミナー

分類しがたいささやかな行為を周囲が楽しむために

障害は本人にではなく、本人と社会との接点に存在するという社会モデルの考え方が普及してきていますが、ものづくりや創作にかかわる行為についても同様のことが言えると感じています。分類しづらく、感覚的な行為の痕跡など、見過ごされがちな営みは多々ありますが、そういったものほど、周囲の人の目や態度・寛容さに支えられています。周囲・周縁が変われば、行為やその人らしさも時に変わってしまうかもしれません。そして「なんでそんなん」な行為には行為をしている人の人間性が色濃く反映されます。

日々の業務に追われる福祉現場や教育現場のサービス利用者、スタッフ（先生）、に次ぐ第三の目として、美術関係者や文化関係者、または、まったく違う分野の専門家が介入することで、現場から抽出されているであろう「なんでそんなん」な行為や痕跡・作品に目をむけて行くことができたらと考えています。毎年「なんでそんなんオンラインセミナー」を実施し、県内外の様々な方を対象に対話型・参加型のレクチャーを行っています。また、大学などの学術関係機関や福祉従事者、文化事業の中間支援団体、美術館などからの依頼によりレクチャーを実施しています。

ONLINE SEMINAR PARTICIPANT POSTS

オンラインセミナー参加者がみつけた「なんでそんなん」一例

タイトル｜目から落ちた鱗

行為者｜パートナー

発見者｜配偶者 K

お風呂の浴槽付近、洗面所、リビングのテーブルの上。毎日家の中でパートナーの外した1dayコンタクトレンズを発見します。乾燥するとパリッとして、踏むと痛そう。それは判っているのか床には絶対落ちていません。私はコンタクトをしたことがないため、どうしてコンタクトレンズを置きっぱなししてしまうのか、わかりません。もしかしてあるあるなのでしょうか？2枚セットの時もあれば、1枚しか置いてない事もあるのも謎です。とにかく、毎日のように発見するこれを、コンタクトレンズではなくて、別の何かに例えてみたいとあれこれ考えました。花びら？、抜け殻？……そうだ！「鱗」にしよう。不思議な事に名付けた途端、見つけるのが楽しみになっている自分がいました。まさに目から鱗！

博覧会
名称｜第 4 回なんでそんなんエキスポ佐賀
会期｜ 2025 年 11 月 1 日（土）～ 2026 年 1 月 25 日（日）
時間｜ 10:00 - 17:00（入館は 16:30 まで）
会場｜佐賀大学美術館
観覧料｜無料
主催｜佐賀大学美術館
協力｜なんでそんなんプロジェクト / 株式会社ぬか / 放課後等デイサービス ホハル

記録集
2025 年 11 月 1 日発行
名称｜なんでそんなんプロジェクト
企画・発行｜佐賀大学美術館
編集・装丁デザイン｜丹正和臣
執筆｜滝沢達史、丹正和臣

なんでそんなんプロジェクト実行委員会
WEB ｜ nandesonnan.com
Email ｜ contact@nandesonnan.com
Instagram ｜ instagram.com/nande_son_nan
プロモーションビデオ｜ https://youtu.be/i1KLA3t0FEw

株式会社ぬか / 生活介護事業所 ぬか つくるとこ
WEB ｜ nuca.jp
Email ｜ info@nuca.jp
Instagram ｜ instagram.com/nuca_tsukurutoko/
Tel ｜ 086-482-0002
住所｜ 701-0304 岡山県都窪郡早島町早島 1465-1

「ぬか つくるとこ」は生活のケアを柱として、アートを活用した自分らしい生活をおくることのできる福祉事業所です。正面から捉えるとひるんでしまうことも、ちょっと角度を変えてみれば、だれも気付けなかった価値が生まれたりする。そういった価値や個々の魅力が「ぬか漬け」のように時間をかけてゆっくりと発酵し、社会へと広がって行くことを願って運営しています。

佐賀大学美術館
WEB ｜ https://museum.saga-u.ac.jp/
TEL ｜ 0952-28-8333
住所｜〒 840-8502 佐賀市本庄町 1 番地

nandesonnan web
nandesonnan PV
nuca web
佐賀大学美術館 web

写真＝タイトル｜クロンの閉め忘れ　行為者｜中野厚志　発見者｜丹正和臣